

## はじめに

私達の町は、どのように推移、発展してきたのでしょうか。  
先人達から引き継がれた今を、そしてこれからを、どう受け止め  
目指したらよいのでしょうか。  
そのためにも、「町会誌」の作成は必要と考えます。

(会報「あけはら」第4号より)

このように、作成への参画、協力を会員の皆様に呼びかけたのは、二年前のことでした(平成26年9月)。その後、小委員会(仮称:町会誌作成委員会)を立ち上げ、緒につきました(平成27年1月)。

蓄積された資料等は極めて乏しいなかであって、可能な限り、正確さを求めている記述に努めました。

不明確や欠落部分について、ご指摘いただければ幸甚です。検討と吟味の上、「繕(つくろ)う」所存です。

「繕う」と書きましたが、この言葉から、織られた布を思い浮かべます。

強靱な布ほど「繕う」と無縁です。それは素材と織り方に深く関わっているのではないのでしょうか。すなわち、繊維を引き出して糸にする「紡ぐ」段階と、糸を縦横に細かく組み合わせ、機(はた)にかけ、布に仕立てる「織る」一連の工程に係る事柄です。

作成に携わる過程で、「織る」ことに擬(なぞら)えて考えさせられました。縦糸に託されているものは何か。緯糸(よこいと)に課せられているものは何か。

明原町会という、かけがえのない、特色を持った「織物」を、更に強靱に、しかも、しなやかで美しく織りなしていくことが求められているのではと。

縦糸には、今までの歩みの重さと、未来を見据えた自治の気概を含ませ、  
緯糸には、協働・支え合いの豊かな心情を滲ませたいと強く思います。

それらを、本誌から汲み取っていただき、「よすが」にされるよう切望します。

平成29年2月吉日

明原町会長  
落合 尚男

## 明原の地名について

「明原」の地名は、新たに作られた地名であるが、江戸時代には下総国篠籠<sup>しほかご</sup>田村と称した地区であることが、赤城神社の社銘に刻まれている。角川の「日本地名大辞典」によれば、日本では唯一の地名であり、他のどの地区にも無い町名である。後世になり篠籠田は、大堀川より南で豊四季に囲まれている広大な地域で大字となり、その小字である「上須原・下須原」が明原の地域である。一部に「乗馬ヶ谷<sup>じょうばがや</sup>」とも呼ばれた所もあり江戸時代由来の小金牧<sup>うまよ</sup>の馬避けの長い土塁が残っていた。森林の大地と大堀川の支流となる小川の作りだす谷地が昭和 30 年代中頃まで存在した。近くの森林には野うさぎ・狸が、夕方にはコウモリが、小川にはドジョウ・ザリガニなどが生息する自然豊かな地域であった。

昭和 29 年（1954）市制が施行され国道 6 号線が開通し、昭和 31 年（1956）に柏駅西口ができ明原地区も急速な宅地開発がおこなわれた。この地域は柏町の時代から大字「篠籠<sup>しほかご</sup>田」といわれ「明原」の地名は、この宅地急増により、当時から比較的多くの人々が住んでいた「明仄<sup>あけぼの</sup>」と「上須原・下須原」が合併し大字に昇格、両者から一字ずつとってあらためて「明原<sup>あけはら</sup>」となった。それは現在の高島屋通り付近より西側、「末広町」「旭町」に属する地区も含まれた広大な地域であった。なお「篠籠田」は新しい町名の独立により、大きく北西部に縮小され現在に至っている。明原地区はその後、住宅が急増し再び行政上の利便性から「明原」「あけぼの」の町名に分かれそれぞれ今の名称となった。

現在の「明原」は昭和 33 年（1958）に許可認定を受け昭和 38 年に着工した「柏駅西口区画整理事業」の工事推移により、昭和 42 年～45 年にかけて 1 丁目～4 丁目に分かれ現在に至る。

区画整理事業工事により小川の流れていた谷地、田圃は宅地、商業地となり台地の森林、畑は良好な住宅地として生まれ変わった。

柏西口第一公園が昭和 41 年（1966）に着工されたが、この頃には現在の「明原」の地域確定がされたと思われる。

今の「明原」は国道 6 号線より西で、あけぼの町と接し北は篠籠田、南は旭町、豊四季台、向原町、西は西町に囲まれた地域で世帯数 2400 戸、居住人口 4600 人（平成 22 年）を要する町として発展してきた。

一部地域ではマンション、ビルなどの増加により町が変貌していくことが考えられるが「明原」の町名が付けられた原点の様子を思い起こすこともたいせつなことである。

